

日本における北米先住民研究の歴史と現状

Trends in Native North American Studies in Japan

文化人類学分野

Cultural Anthropology

伊藤敦規
ITO Atsunori

はじめに

本稿の目的は、日本国内の文化人類学・社会人類学・民族学分野（以下、文化人類学分野と総称）におけるアメリカ合衆国およびカナダ国内に居住する先住民¹（以下、北米先住民と総称）研究の歴史と現状を概観するとともに、同研究の発展的な未来を見据えた今後の課題を民族誌リアリズム批判や調査対象コミュニティの知的財産保護といった観点から検討することにある。なお本稿の前半部を占める研究動向については、1980年代までの動向を青柳・綾部、岡田（青柳・綾部 1986；青柳 1996；岡田 1996）、1990年代以降は岸上の研究動向論文（Kishigami 2004d）を主要参照先としたことを予め断っておく。

日本国内の文化人類学分野の上部学会組織である日本文化人類学会（旧日本民族学会）発行の『日本文化人類学会会員名簿【文化人類学第71巻別冊】（2006年8月31日現在）』によると、2006年8月31日現在での物故会員を除く学会員数1911名の中で160名の会員が自身の研究対象地域（複数回答有り）に北米を挙げている（日本文化人類学会 2006）。ただし、多くの学生会員や賛助会員などが研究対象地域欄を空白にしているため（372名）、160名／1539名（1911名－372名）が北米を研究対象地とする遡及可能な学会員数であるといえる。筆者が調べたところ、この全学会員数の10.4パーセ

ントを占める北米研究者の中で北米先住民に関する研究成果を公開しているのは23名(研究対象地域遡及可能な1539名全会員の1.5パーセント)に留まる。このことから日本国内の文化人類学分野の上部学会である日本文化人類学会において北米先住民研究は研究者人口が極めて少ない分野であることが理解できよう。²

文化人類学分野における北米先住民研究自体は小規模なものではあるが、その研究テーマは多岐に渡る。2007年3月末日現在までに日本国内で公開されてきた個別テーマとして以下を挙げることが出来る。数量的に最も多い「生業」や「水産・海洋資源管理」をはじめ、「総論」、「言語」、「社会・文化変容」、「神話・世界観」、「都市」、「宗教・儀礼」、「アート」、「他者表象」、「ジェンダー」、「親族」、「紀行」、「アイデンティティ」、「歴史」、「命名方法や民俗的知識」、「教育」、「交易・経済」、「開発」、「政治・権利問題」、「医療」、「観光」、「住居」、「移住」、「食」、「博物館」、「遊び」といった研究テーマである。この様にテーマに幅が見られるのは、個々の研究者の幅広い問題関心に依拠しているばかりではなく、現地に赴き、北米先住民コミュニティーにて生活を共にすることで、彼ら／彼女らが抱える同時代的な社会問題を肌で感じながら民族誌記述を志すフィールドワークという調査手法を重要視する文化人類学分野自体の学問的特徴と深く関わっているためである。

この様に、今日では多様なテーマを抱える文化人類学分野の北米先住民研究ではあるが、その歴史を振り返ると1980年代までは考古学的研究が主流を占めており、90年代に入ってからようやく文化人類学的研究と言語学的研究がそれまでの考古学的研究を数の上で凌いでくるのである。次にそうした研究テーマの変遷や地域ごとの文化人類学分野における北米先住民研究を振り返ってみることにしよう。

1. 歴史と現状

文化人類学分野における北米先住民研究は歴史的経緯やその後の研究成果の蓄積により以下の四つの地域に大別することが出来る。①アラスカ、②カナダ極北地域、③亜極北・北西海岸・カナダ南部、④アメリカ合衆国本

土の四地域である。以下では地域ごとに展開してきた研究蓄積の概略を極めて簡単に紹介する。

日本国内の文化人類学分野における北米先住民研究の先がけは、1960年に行われた明治大学アラスカ調査団であった。この調査団には日本の文化人類学分野の創設に携わった岡正雄をはじめ、祖父江孝夫、岡田宏明、蒲生正男、宮岡伯人といった調査団発足以前から日本国内の文化人類学分野をリードしていた研究者達が名を連ねていた。彼らのアプローチは遺跡の発掘やライフヒストリーを通じた過去と現在の生活や集落の移動と変遷に注目する民族考古学、言語や方言に注目する言語人類学、そして生業活動に注目する生態人類学に収斂していた。アラスカ調査は第二次（1962年）、第三次（1967年）まで継続され、³ そこで得られた調査成果は1978年に国立民族学博物館で開催された国際シンポジウム「アラスカの文化と歴史」などにて公開され、北米から招かれた研究者達に共有されることとなった（Kotani and Workman 1980）。

1980年代に入り文部省科学研究費補助金の交付を得たアラスカ研究は、岡千曲、岡田宏明、岡田淳子、蒲生正男、宮岡伯人といった1960年代に行われた調査団のメンバーを核として行われた（第一次1980年度、第二次1982年度、第三次1984年度）。1980年代のアラスカ調査は言語学・民族考古学的な視点に則った内容であり、その研究成果は1986年の日本民族学会研究大会の分科会「アラスカの言語・文化・歴史」にて公開されている。1987年に行われた早稲田大学北方言語・文化研究会主催のシンポジウムやそれをまとめた『民族接触——北の視点から』の刊行をはじめ、1991年に北海道網走市に開館した北海道立北方民族博物館での国際シンポジウムやその報告書『北方民族文化シンポジウム報告』、ならびに同館の紀要『北海道立北方民族博物館研究紀要』を媒体として、日本人によるアラスカ研究成果が徐々に蓄積されてきた。1990年代に入り益子待也によるトリングットの儀礼や世界観研究（益子1982、1992、1993、2002、2005、2006）、井上敏明によるグイッチンを対象としたアイデンティティ研究や自然資源管理に関する研究（井上1996、1999、2001、2003、2004、2005、2006、2007）、岡庭義行による19世紀末にキリスト教へ改宗しアラスカ・アネット島に移

住したアラスカ・チムシャンのダンカン・ソサイエティーに関する歴史や先住権の問題についての一連の研究などが継続的に行われているため（岡庭 1998a、1998b、1998c、2006b）、日本国内におけるアラスカ研究は北米先住民研究分野において精力的に行われている地域であるといえよう。

次にカナダ極北地域における研究成果に目を転じてみる。岡田がまとめたように 1980 年代半ばまでのエスキモー研究はアラスカ地域に集中していたが、スチュアート・ヘンリを中心とする調査団発足を機に北西準州での継続的な考古学・民族学調査が行われるようになってきた（岡田（宏）1996）。そしてカナダ極北地域におけるカナダ・イヌイットを対象とした研究は、今日の文化人類学分野における北米先住民研究の中で最も活発な研究が行われている対象地域へと発展してきた。

トロント大学で極北考古学を学んだスチュアートは民族考古学をそもそもの専門領域としており、1975 年にペリー湾岸で民族考古学的調査を開始した。1990 年に生業活動の実態把握という民族学的関心に移行したスチュアートは早稲田大学大学院での師弟関係にあり、既に 1984 年にハドソン湾東部のアクリヴィク村にて社会人類学的調査を始めていた岸上伸啓や、大村敬一を調査に参加させペリー湾岸での民族誌的調査を再開した。スチュアートはネツリック・イヌイットの狩猟と漁労活動が彼らのアイデンティティ形成に重要な意味を持つことなどを明らかにし（スチュアート 1990、1991a、1992、1993a）、岸上は彼らの社会構造や近代化に伴う社会変化、海獣の肉の拡大家族間での食料分配など親族関係に注目する社会人類学的な研究成果を 1980 年代後半から 90 年代前半までに多数残しており、それらの多くを『極北の民——カナダ・イヌイット』にまとめている（岸上 1987、1988、1991、1994c、1998a）。大村は民俗語彙の採集や色彩や人体部位、空間といった彼らの認識を調査し色彩の重要性を明らかにしている（大村 1995、1996a）。また、大村はソープストーン彫刻をはじめとするアートに注目し、その象徴的意味の考察やアイデンティティ形成上の役割についての研究成果も残している（大村 1996b、2001b）。

ここで挙げた三名はその後個々にも精力的な現地調査を行っており、スチュアートは「エスキモー」から「イヌイット」へのマスメディアにおけ

る表象の変遷と狩猟活動の変容の関係性について（スチュアート 1998a、2005e）、岸上はヌナヴィク・イヌイット社会におけるキリスト教の浸透や社会変容、社会構造、政府主導の狩猟プログラムによる新たな食料分配とアイデンティティ形成、海洋資源の利用と管理などについて（岸上 1992a、1998c、2001a、2002a、2002b、2002d、2003c）、大村は野生生物や海洋資源利用と管理における伝統的生物学的知識の利用について（大村 2002b、2002c、2002d、2003a、2003b、2003c、2005b、2005d）、それぞれ広範な研究成果を残している。彼ら三名がリードするカナダ・イヌイットに関する多岐に渡る研究成果は今日では日本国内におけるカナダ極北地域の先住民研究の礎となっているばかりか、現代社会を生きる狩猟採集民社会の詳細で先端的な研究成果として日本国内の文化人類学分野全般での評価も非常に高い。

では、亜極北・北西海岸・カナダ南部という極北地域を除いたカナダ国内地域の先住民を対象とした日本国内で蓄積されてきた研究にはどのようなものがあるのだろうか。亜極北地域では 1960 年代から 1990 年代にかけて原、煎本、新保、大曲らが調査を行ってきた。原は北西部のヘアー・インディアンを対象とする調査を 1960 年代から行っており当時盛況を呈した文化人類学分野の親族研究に対する貢献をしてきた（原 1967、1970、1989）。煎本は 1970 年代半ばにチペワヤンで生態人類学的実地調査を行ったトナカイ猟やカリブー猟についての研究成果を（煎本 1980、1981）、新保は 1980 年代末から 90 年代にかけてデネー社会で調査を行い、学校教育という現場から彼らの都市移住を含む社会変化を追った研究成果を残している（新保 1967、1968、1993、1999）。

1990 年代に入り、ジェームズベイ・クリーの伝統的知識を調査した大曲佳世や、カナダ北西海岸のバンクーバー島南部のサーニッチにおける伝統文化の現代的意味を考察した渥美一弥、そして同じくバンクーバー島のクワクワカワクウ（クワキウトル）漁業生活者社会での長期フィールドワークに基づき彼らの商業的漁業活動と伝統的海洋資源管理に関する研究を継続して行ってきた立川陽仁の若手研究者三名が、近年研究成果を博士論文にまとめている（Ohmagari 1996；渥美 2007；立川 2007）。北西海岸地域に

相当するブリティッシュ・コロンビア州にはカナダ連邦政府が承認している約 600 の先住民のバンド（ファースト・ネーション）と呼ばれる行政組織の内の約 200 が存在しており、上記したサーニッチやクワクワカクウ以外にはニスガーとシーシェルトの先住権の主張やカナダ政府との条約締結について山田亨が（山田 2005）、メトラカトラの観光化やアートに関する研究を齋藤玲子が行っている（齋藤 2000）。また岩崎グッドマンまさみは日本のアイヌ研究やカナダ西部極北地域に住むイヌビアルイトの他に主にブリティッシュ・コロンビア州のコームラント島に居住するナムギースの人々によるサケ漁や水産資源管理についての研究を継続的に行っており（岩崎グッドマン 1999、2002a、2002b）、日本国内の北西海岸地域研究は 1990 年代以降確実に発展してきている。

カナダ南部については 1996 年以降岸上による都市在住先住民コミュニティの文化人類学的調査が行われている（岸上 1999b、1999c、1999d、2002c、2006b、2006c）。19 世紀半ばのフランツ・ボアズによるイヌイットに関する文化人類学的研究以来、都市在住のイヌイット研究は殆ど行われていない状況にあった。ケベック州モンリオール地区在住イヌイットへのインタビューを通して、都市への移動理由や都市生活の状況、出身地との関係、コミュニティ形成過程などを主要項目とした調査を行った。2001 年のカナダの国勢調査によると、イヌイットの総人口は約 45000 人であるが、その内約 5000 人がオタワやエドモントン、モンリオール、トロント、バンクーバーといったカナダ南部の大都市を生活の拠点としている（岸上 2006b；スチュアート・岸上 2007）。こうしたイヌイットの現実を考えるとカナダ南部の都市人類学的研究の今後のさらなる発展が期待される。

最後にアメリカ合衆国本土で実施されてきた日本人研究者による調査とその研究成果について概略を示したい。アラスカを除くアメリカ合衆国国内の先住民研究の指導的な立場にある青柳清孝はシカゴやアルバカーキといった大都市にて都市人類学的調査を行い、都市在住先住民のライフヒストリーを収集してきた（青柳 1998a、1998b、1999）。また、様々な地域から都市に移住してきた者達の子供が人種統合という目的のために寄せ集められるマグネット・スクールと呼ばれる教育システムやその問題に関する

研究成果を残している他に（青柳 1998b、2001）、近年ではアメリカ先住民保留地内での部族政府による経営が連邦政府によって認められているインディアン・カジノについて経済開発という視点から考察を残している（青柳 2000）。他には青木晴夫や高橋順一の言語学的研究や（青木 1972；高橋 1985a、1985b、1986）、北沢方邦の構造人類学的な手法によるアリゾナ州に居留地を有するホピの世界観の分析（北沢 1995）、同化主義政策の下での個々の部族の伝統が汎インディアン的な内容に置き換わりつつある状況と個々人のアイデンティティのあり方の関係性について考察した谷本和子などの研究成果がある（谷本 1998a）。谷本は 2000 年代以降調査対象をネズ・パースからナヴァホに移行し、出場者の伝統性を重んじるミス・ナヴァホ・コンテストについての研究を始めている（谷本 2006）。また玉山はニューメキシコ州のラゲーナ・プエブロ社会におけるウラン鉱山での放射能被爆と部族政府による対応や NGO による被爆者救済プログラムに注目した研究を開始した（玉山 2006）。一風変わった研究として伊藤敦規が行っているホピと日本のマーケットや知的財産権についての調査と研究を挙げておこう。伊藤はフィールドワーク対象を先住民社会だけ限定するのではなく、今日巨大なマーケットに成長している日本市場におけるホピ製のジュエリーの流通過程や販売店舗への現地調査を行い、日本企業や個々の店舗による模倣品製造や違法販売事例を提示した（伊藤 2005、2006、2007b）。日本国内の市場調査で得た情報や対応策をホピの作家やギャラリー経営者、部族政府関係者等に提供することで問題意識を共有し彼らと共同で市場管理と知的財産権の保護を志向する実践的な研究を開始している（伊藤 2007a）。

こうした研究成果が蓄積されつつあるものの、日本国内の文化人類学分野における北米先住民研究はカナダ研究が圧倒的多数を占めている。北米先住民の人口（カナダ約 98 万人：2001 年、アメリカ合衆国約 284 万人：2000 年）を考慮すると非常に偏りのある地域研究となっていることが分かる。この事実は青柳が文化人類学分野の北米研究（北米先住民研究に特化しない）を振り返った 1986 年に「アメリカ研究に対してカナダ研究の量が著しく少ない」と指摘した点が、2007 年現在では逆転していることを表している（青柳・綾部 1986）。また、青柳が 1996 年の研究動向をまとめた論

文で述べているように、「これまでの研究事例は部族集団の数からいっても決して充分であるとはいえず、研究内容も対象とした部族集団の全貌を把握するものであったとはいいがたい」という状況はその後10年を経た2007年においても殆ど変わっていない（青柳1996）。確かに、社会学やネイティブ・アメリカン・スタディーズといった文化人類学分野の隣接研究領域の研究者が長短のフィールドワークを経た後に公開した諸研究の中には、合衆国本土の先住民の現在の姿や社会問題を描いた業績がいくつかある（阿部1994、2005a、2005b；石山2004、2006；鎌田2006；牧田1998、2000；馬籠1999；水野2005）。しかし、文化人類学分野に限ってみると、1970年に刊行された永田脩一の博士論文は長期フィールドワークに基づくホピの社会変化についての詳細な民族誌であるが（Nagata 1970）、それ以降、日本人研究者による先住民保留地やコミュニティでの長期間のフィールドワークで得た知見を基とする研究成果の公開は殆ど為されていないのである。

2. 今後の文化人類学分野の北米先住民研究

これまで概観してきたように、日本国内における文化人類学分野の北米先住民研究ではアラスカやカナダの先住民研究に比べアメリカ合衆国本土の先住民研究が圧倒的に少ないことが明確になった。こうした傾向が現れる背景にはどのような要因が考えられるのであろうか。想定可能な諸要因と共に今後の北米先住民研究一般の将来的発展を見据えて幾つかの課題を提示してみることにする。

岸上が述べているように、アラスカやカナダにおける日本国内の文化人類学分野の研究が1960年代以降発展してきた要因は、文部科学省の科学研究費補助金という研究資金の獲得をはじめ、国立民族学博物館や北海道立北方民族博物館が主催するシンポジウムでの研究者間の交流や研究成果公開の場が整備されてきたこと、さらに研究領域を開拓してきた研究者から次世代の研究者への指導が行われてきた教育的背景などが相互に関連してきたことを挙げる事が出来よう（Kishigami 2004d）。他方、アメリカ

合衆国本土の先住民研究には、近年の動向として、2006年の阿部珠理によるアメリカ学会内でのアメリカ先住民分科会開催や、同年岸上伸啓を研究代表者とする国立民族学博物館での共同研究会（北アメリカ先住民の開発）開催によって、専門地域や研究領域を超えた研究者間の交流が促進されつつある状況になってきてはいるが、⁴ 過去において上記したようなアラスカやカナダにおける日本国内の文化人類学分野の発展に寄与するような基盤は殆ど形成されてこなかった。研究者自体の数が非常に乏しい状況において日本文化人類学会の研究大会で分科会が開かれることはなく、またそのために研究者間の交流の場は設けられてこなかったのだ。

こうした日本国内における諸事情とは別に、研究対象となる人々が学者の研究調査行為を敬遠・禁止してきた事実を見逃すことは出来ない。合衆国南西部のプエブロ諸部族は既に1920年代から観光客や学術研究者等に対し儀礼を非公開にしたり宗教的知識や外部者による自文化の表象を拒否したりする「秘密主義」を戦略的に用いてきた（鈴木 2000；水野 2005）。こうした外部者による表象を規制する状況は今日まで続いている。例えばホピ保留地内には13の村落があり、各村落の入り口にはそれぞれ写真撮影・スケッチ・録音行為・徘徊・物品の無断持ち出しや移動などを禁止する旨が書かれた大きな立て看板が立てかけられている（ヴォウテルス 1980[1974-79]: 125；Secakuku 1995: 102）。そしてホピ保留地内での学術調査を行うためにはホピ部族政府の文化保存局から入手困難な調査許可を取得する必要があり、無許可で調査を実施する研究者を強制的に保留地から排除する行政命令も施行されている。近年岸上や水野、本多（スチュアート）、伊藤が述べているように、北米先住民を対象とする学術調査を行う場合、現地コミュニティからの調査許可取得が必須事項となっていることをはじめ、調査許可取得に絡む政治的問題、つまり誰から許可を得るべきかという代表性への自覚と配慮、さらに調査許可取得後の問題としての調査結果の公開に関する倫理的問題や度重なる事前検閲といった調査や研究成果の公開から派生するプライバシーや知的財産権に関連する諸事項を絶えず遵守する必要があり研究活動は非常に制限された内容となっている（岸上 HP；Kishigami 2004d；水野 2005；本多・大村・葛野 2005；伊藤 2006）。

先住民批評家の急先鋒であったヴァイン・デロリア・ジュニアが文化人類学分野をはじめとするアメリカ先住民を研究対象とする学者を「おそらく彼らの関心はインディアンに対して影響力を与える重要な政策立案ではなく、単に学会での地位を確立するために新しい学説を創出することに尽きるだろう。(中略)なぜ我々は人類学者のために彼らの私設動物園にならねばならぬのか」という言葉で批判を開始した1960年代末(Deloria 1970[1969]: 98-99)、ブラック・パワーやレッド・パワーといった権利回復運動とも連動して先住民社会には急速に権利意識が高揚してきた。クリフォードが民族誌家の一般的な肖像を「部族の物語を持ち逃げしてなにも返さず、複雑な人々に粗略な肖像を押しつけるだけの野心に溢れた社会学者」から「洗練されたインフォーマントに、だまされやすいお人好しとして仕えてしまう社会学者」へと変化させたように(クリフォード 1996[1986]: 16-17)、外部の学術研究者に対する現地からの主張は今日でも止むことはなく年々増してきている。学術調査と研究成果公開に関わる表象行為の規制は日本人による合衆国内の先住民研究の発展を停滞させてきた重要な要因になっていたと思われる。

特に1970年代以降、先住民側の権利意識の高揚を受け北米全般をはじめオーストラリアやニュージーランド、北欧、日本など先進国の先住民コミュニティを対象とするフィールドワーク実施が困難になってきている。今日合衆国本土の多くの北米先住民コミュニティにてフィールドワークを行う際には現地コミュニティに対し「彼らが妥当と判断する調査計画」を提出する義務を怠ることが出来ない。北米先住民研究において学者の立場から一方的に「学問の自由」や「学術調査の神聖性」を謳うことは全く意味をなさず、現地コミュニティの意志決定によって調査やその後の研究成果の公開が決定づけられていくプロセスが形成されている(ギアーツ 1996[1988]; Bentz 1997; Whitely 1997; メリル・アルボーン 2003[1997])。文化人類学分野のみならず考古学・言語学・博物館学といった隣接諸分野を含めた欧米が主導する学術世界全体に対して発せられた先住民側からの異議申し立ては、各学問分野の倫理観や調査履行、学術研究の政治性といった諸問題を自省させる契機となったのである。

例えば文化人類学分野では、ここで挙げた調査執行上の貫徹すべき諸事項や困難性は既に1970年代末以降「人類学の危機」として総括される世界的な文化人類学分野への批判の文脈において議論されてきた。サイドやホブズボウム、クリフォードらによって唱えられてきたオリエンタリズム批判、本質主義的表象批判、民族誌リアリズム批判といった観点からである。一方で、日本国内の北米先住民研究状況を振り返るとこうした表象の権力構造に注目した議論は極めて少なかった。その一つの例は1988年に開催された日本民族学会第25回研究大会で「民族学と少数民族——調査する側とされる側」と題された分科会であった。この分科会で採りあげられた課題は主に日本国内のアイヌ研究であったが、北米先住民研究についてスチュアート・ヘンリがカナダ極北地域での調査における規範について幾つかの提言を行っている。分科会自体の総括としてその後の文化人類学分野の研究と先住民との関係についての具体的な方針は討論されなかったが、調査対象民族に関する本質主義的表象および「滅びゆく民族」の文化を「記録保存」するための学問であるという研究者側に根強く残余している姿勢や認識を変革すべきであるというコンセンサスは得られたようであった。また、調査される側の対象民族がマジョリティー社会の中でどの様に共存していくかを実践面からサポートするような応用人類学的研究によって調査する側とされる側の協力関係を構築するべきだという意見も既に出されていた。

ただ、その後の研究との有機的接合性は乏しく、こうした問題が再登場するのは2000年代半ばまで待たなければならなかった。先に挙げた岸上、水野、本多（スチュアート）、伊藤等による考察の他に（岸上 HP；Kishigami 2004d；水野 2005；本多・大村・葛野 2005；伊藤 2006）、大村敬一による総論や岸上伸啓による自身の都市におけるイヌイト・コミュニティ研究から応用人類学的調査の必要性を説いた論考の登場である（大村 2005c；岸上 2006b）。大村と岸上は共にサイドのオリエンタリズム批判（サイド 1993[1978]）、ホブズボウム等による本質主義批判（ホブズボウム 1992[1983]）、そしてクリフォードやマーカス等による民族誌リアリズム批判（クリフォード・マーカス編 1996[1986]）を組み込みながら独自の論を展開している。彼らの結論は、研究者は他者としての彼らと創造的

な対話を可能にするある種のフォーラムを実施すべきであるという（大村 2005c: 48；岸上 2006b: 520-521）。こうした議論の展開はロサルドや太田等がいうような現地社会からの批判を受け入れるアリーナの創造とも共通している（ロサルド 1998[1993]；太田 2001）。

3. 展望

以上を背景として今後の展望として以下の二点を挙げたい。まず、逆説的ではあるが、文化人類学分野の北米先住民研究の今後の発展を望むのならば、権力関係に派生する表象の政治性といった問題にさらに意識的になると同時に、調査に伴う困難性についての具体的事例報告を展開すべきである。次に、先住民社会やコミュニティーが妥当と判断する調査計画が望まれているため、ホワイトリーやクリフォード、岸上等がいうように具体的な政策立案や実践的「開発」活動への文化人類学者の姿勢および手法の提示に重きをおく事前研究や調査許可取得後の研究成果の増加が期待される（Whitely 1997；クリフォード 2002[1997]；岸上 2006b）。

もちろん、ここで展望として挙げたこれら二点は単に今後の現地調査を行う上での研究計画立案のための貴重な資料となるばかりではない。大村や岸上が提唱するような相互意見を交わせるフォーラムの前提でありそれ自体でもある調査許可の取得や共同計画の立案、研究成果の公開以前の検閲と知的財産権の帰属と管理に関する協議といった事柄は北米先住民研究において今後さらに先鋭化していくと思われる。こうした諸点を契機として「人類学の危機」以降の北米先住民研究から文化人類学分野一般に対して投げかけ得る具体的内容は今後の学界全体の発展を鑑みても非常に意味のある重要な問いかけとなるだろう。また、類似した問題系をかかえる歴史学や言語学、社会学、博物館における収集物の展示や管理、考古学分野における文化資源管理といった隣接諸分野とも問題意識の共有が可能であるために学際的な研究の発展が大いに期待される領域といえよう。

【付記】

本稿は東京都立大学・首都大学東京第703回社会人類学研究会（2006年5月26日）、および、アメリカ学会第40回年次大会第1回アメリカ先住民研究分科会（2006年6月11日）における報告をもとに執筆した。

註

1. 本稿では、ヨーロッパ系入植者が入る以前から北米に居住していた者の総称として「先住民」を用いるが、固有名詞化している政府機関の名称および引用文中においては「インディアン」、「アメリカ（ン）・インディアン」、「ネイティヴ・アメリカン」、「バンド」、「ファースト・ネーション」、「部族」という呼称も併用する。
2. 2006年6月4日と5日に行われた第40回日本文化人類学会研究大会での発表者総数239名のうち、北米先住民関連の発表を行ったのは3名（研究大会全発表者の1.26パーセント）であった。なお、文末の文献目録には日本文化人類学会に所属していない研究者や既に退会した者でも参与観察に基づく研究成果を公開してきた者についてはその業績を載せている。
3. 民族学研究班の構成員は1962年の第二次が岡正雄・蒲生正男・岡田宏明、1967年の第三次が蒲生正男・岡田宏明・宮岡伯人であった。
4. 2006年に国立民族学博物館で開催したシンポジウム「北アメリカ先住民の開発」には北米地域全体から発表者を募り、その研究成果はすでに刊行されている（『季刊民族学』118号）。また綾部恒雄監修による学際的な先住民研究の大著『講座 世界の先住民民族』全10巻が近年出版されたが、その中で北米先住民が一巻を占めた。『北米』には18名の寄稿者がおり、その内8名がアラスカとカナダ先住民を担当し、10名がアメリカ合衆国本土の先住民を担当した。ただし、合衆国本土の寄稿者10名の内5名は歴史学を専門領域としており、文化人類学分野の研究者として寄稿したのは馬場優子と北沢方邦の2名のみであった。

参考文献

（本文中で使用し、後記の主要文献目録に掲載されていないものに限る）

〔邦語文献〕

ヴォウテルス、ヘルマン

1980[1974-79]（米山俊直、野口武徳、山下論一訳編）『世界の民族と生活 第4巻北アメリカ』ぎょうせい。

太田好信

2001 『民族誌的近代への介入——文化を語る権利は誰にあるのか』（叢書文化研究1）人文書院。

ギアーツ、クリフォード

1996[1988]（森泉弘次訳）『文化の読み方／書き方』岩波書店。

クリフォード、ジェイムズ

1996[1986]「序論——部分的真実」ジェイムズ・クリフォード、ジョージ・マーカス（編）（足羽与志子他訳）『文化を書く』, pp. 1-50. 紀伊国屋書店.

2002[1997]（毛利嘉孝他訳）『ルーツ——20世紀後期の旅と翻訳』月曜社.

サイド、エドワード

1993[1978]（今沢紀子訳）『オリエンタリズム』平凡社.

鈴木雅雄

2000 「『ギヴ・ミー・ユア・ブック』——ブルトンとホピ・インディアンとの出会いに関する覚書」鈴木雅雄、真島一郎（編）『文化解体の想像力——シュルレアリスムと人類学的思考の近代』, pp. 290-303. 人文書院.

角達之助

2006 「明治大学政治経済学部寄託アラスカ収集の銆頭類」北海道立北方民族博物館（編）『環北太平洋の環境と文化』, pp. 292-308. 北海道立北方民族博物館.

日本文化人類学会

2006 『日本文化人類学会会員名簿【文化人類学第71巻別冊】（2006年8月31日現在）』日本文化人類学会.

ホブズボウム、エリック・レンジャー、テレンス

1992[1983]（前川啓治・梶原景昭訳）『創られた伝統』紀伊国屋書店.

メリル、ウィリアム・L、アルボーン、リチャード・E

2003[1997]「ズーニーの彫像——天使と軍神」A. ヘンダーソン、A.L. ケプラー（編）（松本栄寿、小浜清子訳）『スミソニアンは何を展示してきたか』, pp. 180-204. 玉川大学出版部.

ロサルド、レナート

1998[1993]（椎名美智訳）『文化と真実——社会分析の再構築』日本エディタースクール出版部.

[英語文献]

Bentz, Marilyn

1997 “Beyond Ethics: Science, Friendship, and Privacy” In Biolsi, Thomas and Larry J. Zimmerman (eds.) *Indians & Anthropologists: Vine Deloria, Jr., and the Critique of Anthropology.*, pp. 120-132. Tucson, Arizona: University of Arizona Press.

Deloria, Vine, Jr.

1970[1969] *Custer Died for Your Sins: An Indian Manifesto.* New York: Avon.

Secakuku, Alph H

1995 *Following the Sun and Moon: Hopi Kachina Tradition.* Flagstaff, Arizona: Northland Publishing in cooperation with The Heard Museum.

Whitely, Peter

1997 “The End of Anthropology (at Hopi)?” In Biolsi, Thomas and Larry J. Zimmerman (eds.) *Indians & Anthropologists: Vine Deloria, Jr., and the Critique of Anthropology.*, pp. 177-207. Tucson, Arizona: University of Arizona Press.

[ウェブサイト]

岸上 <http://www.minpaku.ac.jp/staff/kishigami/wp.html> (2007年3月31日現在)

日本における北米先住民研究主要文献目録 文化人類学分野

以下の文献目録は、アメリカ学会第40回年次大会第1回アメリカ先住民研究分科会（2006年6月11日）における報告の際に配布した目録に加筆・訂正を施したものである。

なお、訂正に際して紙数の関係上、科学研究費補助金研究成果報告書をすべて省略したほか、訳書、書評、会議参加報告、新聞記事、さらに国立民族学博物館発行の『月刊みんぱく』、『季刊民族学』、『民博通信』、および北方民族博物館編集の『北方民族文化シンポジウム報告』掲載の記事・コラム等を概ね省略した。

青木晴夫

- 1972 『滅びゆくことばを追って——インディアン文化への挽歌』三省堂。
1979 『アメリカ・インディアン——その生活と文化』講談社。

青柳清孝

- 1982 「部族のアイデンティティ——オクラホマのアナダーコーとその近辺のインディアン」綾部恒雄（編）『アメリカ民族文化の研究——エスニシティとアイデンティティ』, pp. 53-82. 弘文堂。
1995 「ネイティブ・アメリカン（アメリカ・インディアン）——一九六〇年代以降の動向」有賀貞（編）『エスニック状況の現在』（JIA 現代アメリカ 4）, pp. 57-89. (財) 日本国際問題研究所。
1996 「北米」ヨーゼフ・クライナー（編）『日本民族学の現在——1980年代から90年代へ』, pp.369-378. 新曜社。
1998a 「シカゴのインディアン——転住の個人史と援助組織」『人間・文化・心』（京都文教大学人間学部研究報告）1, pp. 237-248. 京都文教大学。
1998b 「シカゴのマグネット・スクール——人種統合への模索」『人間・文化・心』（京都文教大学人間学部研究報告）2, pp. 215-224. 京都文教大学。
1999 「大都市シカゴとインディアン——都市先住民社会史への試み」青柳清孝、松山利夫（編）『先住民と都市——人類学の新しい地平』, pp. 213-228. 青木書店。
2000 「インディアン保留区のカジノと開発」青柳まち子（編）『開発の文化人類学』, pp.223-240. 古今書院。
2001 「都市インディアンと公立学校教育——アーバカーキーとシカゴの事例」『人間学部研究報告』3, pp. 183-191. 京都文教大学。
2002 「博物館の展示とアメリカ・インディアン」『人間学研究』3, pp. 85-97. 京都文京大学人間学研究所。
2006a 『ネイティブ・アメリカンの世界——歴史を糧に未来を拓くアメリカ・インディアン』古今書院。
2006b 「ネイティブ・アメリカンの現代的多様性」『季刊民族学』118, pp. 52-55. 国立民族学博物館。

青柳清孝、綾部恒雄

1986 「北アメリカ」日本民族学会（編）『日本の民族学 1964-1983』, pp.291-305. 弘文堂.

秋道智彌、岸上伸啓（編）

2002 『紛争の海——水産資源管理の人類学』人文書院.

渥美一弥

1991 「虹を掲げた人々——ニシカ族の教育と神話的世界」『民族学研究』56(2), pp. 209-218. 日本民族学会.

1996a 「『伝統的な』名と『伝統的に』名づけること——カナダ・北西海岸先住民の『インディアン名』と命名儀式の今日的意味について」『地域研究』12, pp. 48-64. 東京外国語大学.

1996b 「『伝統文化』を「名乗る」こと——カナダ・サーニッチ族の神話、地名、個人名の今日的意味について」『民族学研究』61(1), pp. 105-125. 日本民族学会.

2007 「『情報』の経路としてのネイション——カナダ西岸先住民サーニッチにおける民族的「情報」と「現実」』（一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻提出博士論文）

阿部珠理

1994 『アメリカ先住民の精神世界』日本放送出版協会.

2000 「作られる『インディアン』——『高貴なる野蛮人』の系譜」聖徳大学総合研究所（編）『聖徳大学言語文化研究所論叢』7, pp. 305-321. 聖徳大学出版会.

2001 「犬でも狼でもなく——ラコタ・スー族におけるエスニック・アイデンティティの創造」宇野邦一、野谷文昭（編）『マイノリティは創造する』, pp. 179-200. せりか書房.

2002 「先住民文化再生への視座」西村頼男、喜納育江（編）『ネイティブ・アメリカンの文学——先住民文化の変容』, pp. 39-57. ミネルヴァ書房.

2003a 「環境とマイノリティ——先住民族の知恵に学ぶ」『応用社会学研究』45, pp. 17-23. 立教大学社会学部.

2003b 「アメリカ・インディアン・アイデンティティと文化創造——汎インディアン運動を中心に」『立教アメリカン・スタディーズ』25, pp. 71-88. 立教大学アメリカ研究所.

2005a 『アメリカ先住民——民族再生に向けて』角川書店.

2005b 「ラコタ・スー——七世代目の民族再生へ向けて」富田虎男、スチュアート ヘンリ（編）『講座世界の先住民族——ファースト・ピープルの現在—— 07 北米』, pp. 119-135. 明石書店.

2006 『大地の声——アメリカ先住民の知恵のことば』大修館書店.

2007a 「ラコタ・コスモロジーと精神世界の現在」綾部恒雄（編）『講座世界の先住民族——ファースト・ピープルの現在—— 10 失われる文化・失われるアイデンティティ』, pp. 58-72. 明石書店.

2007b 「北米先住民・セックス／ジェンダー／第三の性」綾部恒雄（編）『講座世界の先住民族——ファースト・ピープルの現在—— 10 失われる文化・失われるアイデンティティ』, pp. 188-201. 明石書店.

石山徳子

2004 『米国先住民族と核廃棄物——環境正義をめぐる闘争』明石書店.

- 2006 「アメリカ先住民と環境保護」秋元英一、小塩和人（編）『豊かさや環境』（シリーズ・アメリカ研究の越境 第3巻）, pp. 109-130. ミネルヴァ書房.
- 伊藤敦規 ITO Atsunori
- 2005 “Marketing Hopi Jewelry in Japan: An Analysis of the promotional characteristics of Hopi Arts & Crafts in/to Japan.” In *European Review of Native American Studies*, 19(1), pp. 45-48. Wien, Austria: Museum für Völkerkunde.
- 2006 「日本におけるホピ・イメージの流通とホピによる対応」『季刊民族学』118, pp. 66-69. 国立民族学博物館.
- 2007a 「ホピ・ジュエリーの歴史的発展過程とホピによる現在の意味付け」綾部恒雄（編）『講座世界の先住民民族——ファースト・ピープルズの現在—— 10 失われる文化・失われるアイデンティティ』, pp. 244-257. 明石書店.
- 2007b 「コメの国の商人の、トウモロコシの国での宝探し——日本人バイヤーを通したホピ・ジュエリー市場」綾部恒雄（編）『先住民の10年 News』133, pp. 4-7. 先住民の10年市民連絡会.
- 井上敏昭 INOUE Toshiaki
- 1996 「クランから『ネイティブ・アメリカン』へ——アラスカ先住民の儀礼とそこに見るアイデンティティの所在の変化について」『城西国際大学紀要』4(1), pp. 187-206. 城西国際大学.
- 1999 「『文化伝統』としてのビーズワーク——アラスカ・グイッチン社会におけるビーズワークの役割とそこに見る社会的重要性に関する考察」『北海道立北方民族博物館研究紀要』8, pp. 31-56. 北海道立北方民族博物館.
- 2001 “Hunting as a Symbol of Cultural Tradition: The Cultural Meaning of Subsistence Activities in Gwich'in Athabaskan Society of Northern Alaska.” In Ian Keen and Takako Yamada, eds., *Identity and Gender in Hunting and Gathering Societies* (Senri Ethnological Studies 56), pp. 89-104. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2003 「内陸アラスカ先住民社会におけるサケ資源の利用と管理の諸問題」岸上伸啓（編）『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告 46）, pp. 131-160. 国立民族学博物館.
- 2004 “The Gwich'in Gathering: The Subsistence Tradition in Their Modern Life and the Gathering against Oil Development by the Gwich'in Athabaskan.” In Irimoto Takashi and Yamada Takako, eds., *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Series 66), pp. 183-204. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2005 「グイッチン——現代のアメリカ社会を生きる狩猟民」富田虎男、スチュアート ヘンリ（編）『講座世界の先住民民族——ファースト・ピープルズの現在—— 07 北米』, pp. 247-263. 明石書店.
- 2006 「アラスカ・グイッチンの社会」『季刊民族学』118, pp. 78-81. 国立民族学博物館.
- 2007 「『我々はカリブーの民である』——アラスカ・カナダ先住民のアイデンティティと開発運動」煎本孝、山田孝子（編）『北の民の人類学——強国に生きる民族性と帰属性』, pp. 95-122. 京都大学学術出版会.
- 煎本 孝 IRIMOTO Takashi

- 1980 「チベワイアンのトナカイ狩猟活動系——生態人類学的視点から」『国立民族学博物館研究報告』5(3), pp. 642-666. 国立民族学博物館.
- 1981 *Chipewyan Ecology: Group Structure and the Caribou Hunting System* (Senri Ethnological Series 8). Osaka: National Museum of Ethnology.
- 1994 「カナダ・インディアンの文化変化」『カナダ研究年報』14, pp. 1-17. 日本カナダ学会.
- 1996 『文化の自然誌』東京大学出版会.
- 2002 『カナダ・インディアンの世界から』福音館書店.
- 煎本孝、山田孝子 (編) IRIMOTO Takashi and YAMADA Takako (eds.)
- 1994 *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 1997 *Circumpolar Animism and Shamanism*. Sapporo: Hokkaido University Press.
- 2004 *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Series 66). Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2007 『北の民の人類学——強国に生きる民族性と帰属性』京都大学学術出版会.
- 岩崎グッドマンまさみ
- 1999 「サケ資源の減少とナムギースの人々」秋道智彌 (編) 『自然はだれのものか——「コモングの悲劇」を超えて』(講座人間と環境 1), pp.65-86. 昭和堂
- 2002a 「カナダ北西海岸におけるサケをめぐる対立——ブリティッシュ・コロンビア州先住民のケース」秋道智彌、岸上伸啓 (編) 『紛争の海——水産資源管理の人類学』, pp.168-188. 人文書院.
- 2002b 「文化変化理論の変遷とカナダ先住民研究への応用」『北海学園大学人文論集』22, pp. 1-34. 北海学園大学.
- 2003 「次世代のための資源管理——カナダ西部極北地域における海洋資源共同管理」岸上伸啓 (編) 『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』(国立民族学博物館調査報告 46), pp.49-71. 国立民族学博物館.
- 2005a 「イヌビアルイト——ホッキョクセミクジラを捕獲」富田虎男、スチュアート ヘンリ (編) 『講座世界の先住民——ファースト・ピープルの現在—— 07 北米』, pp. 232-246. 明石書店.
- 2005b 『人間と環境と文化——クジラを軸にした一考察』清水弘文堂書房.
- 2006a 「開発事業にともなう社会影響評価 (Social Impact Assessment) の手法——土地をめぐる法体系の葛藤」『立命館言語文化研究』17(3), pp. 3-23. 立命館大学国際言語文化研究所.
- 2006b 「サケをめぐる混沌」北海道立北方民族博物館 (編) 『環北太平洋の環境と文化』, pp. 213-225. 北海道立北方民族博物館.
- 上村英明
- 2004 「『植民地問題』解決のための国連の歴史的的努力と『先住民の国際 10 年』——人類学者のための民族集団に関する国際人権法入門」『文化人類学研究』5, pp. 14-30. 早稲田大学文化人類学会.
- 大塚和義 (編)
- 2001 『ラッコとガラス玉——北太平洋の先住民交易』千里文化財団.

- 2003 『北太平洋の先住民交易と工芸』 思文閣出版.
- 大貫良夫
- 1977 「トーテム・ポール——その社会的ならびに歴史の意味について」『民族学研究』41(4), pp. 317-329. 日本民族学会.
- 大曲佳世 OHMAGARI Kayo
- 1995 “Traditional Knowledge as an Adaptive Strategy for Sustainable Livelihood among the Western James Bay Cree.” In N. Singh and L. Ham, eds., *Community-Based Resources Management and Sustainable Livelihood: The Grass Roots of Sustainable Development*, pp. 118-139. Winnipeg: Institute for Sustainable Development.
- 1996 *Social Change and Transmission of Knowledge and Bush Skills among Omushkegouwak Cree Women*. Ph. D. Dissertation, University of Manitoba.
- 2004 “The Role of Traditional Food in Identity Development among the Western James Bay Cree.” In Irimoto Takashi and Yamada Takako, eds., *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies 66), pp. 127-138. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2007 「アイデンティティ構築におけるブッシュ・フードおよびブッシュの役割——オマシュケゴ・クリーの事例から」煎本孝、山田孝子（編）『北の民の人類学——強国に生きる民族性と帰属性』, pp. 123-145. 京都大学学術出版会.
- OHMAGARI Kayo and Fikret BERKES
- 1997 “Transmission of Indigenous Knowledge and Bush Skills among the Western James Bay Cree Women of Subarctic Canada.” *Human Ecology* 25(2), pp. 197-222.
- 大村敬一 OMURA Keiichi
- 1994a 「描画から何を知ることができるのか？——カナダ・イヌイトの描画 89 例の特徴とその分析上の諸問題に関する予備的考察」象徴画像研究会（編）『象徴画像研究』8, pp. 19-38. 和光大学.
- 1994b 「消えた総数は何を意味しているか？——カナダ・イヌイトの言語の変化とその社会・文化的背景」『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊（哲学・史学編）』21, pp. 105-116. 早稲田大学.
- 1995 「『伝統』と『近代』のプリコラージュとしての彫刻——ネツリック・イヌイトの彫刻活動に関する覚え書き」『人間科学研究』8(1), pp. 1-14. 早稲田大学.
- 1996a 「環境を読む鍵としての色彩——カナダ・イヌイトの色彩語彙と色彩カテゴリーに関する試論」『北海道立北方民族博物館研究紀要』5, pp. 5-45. 北海道立北方民族博物館.
- 1996b 「『再生産』と『変化』の蝶番としての芸術——社会・文化変化の中で芸術が果たす役割」スチュアート・ヘンリ（編）『採集狩猟民の現在——生業文化の変容と再生』, pp. 85-124. 言叢社.
- 1998 「カナダ・イヌイトの日常生活における自己イメージ——『イヌイトのやり方（イヌインナクトゥン）』の『戦術』」『民族学研究』63(2), pp. 160-170. 日本民族学会.
- 2001a 『イヌイトのナビゲーションにみる日常実践のダイナミズム——交差点としての民族誌』（早稲田大学文学研究科博士論文）.
- 2001b 「交差点としての『イヌイト・アート』——エスニック・イメージが生成する対話の場」中牧弘充（編）『国立民族学博物館研究報告別冊——アートと民族文化の表象』22, pp.

- 79-101. 国立民族学博物館 .
- 2002a “Construction of Inuinnagtun (Real Inuit-Way): Self-Image and Everyday Practices in Inuit Society.” In Henry Stewart, Alan Barnard, and Omura Keiichi, eds., *Self and Other-Images of Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies, 60), pp. 101-111. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2002b 「『伝統的な生態学的知識』という名の神話を超えて——交差点としての民族誌の提言」『国立民族学博物館研究報告』27(1), pp. 25-120. 国立民族学博物館 .
- 2002c 「カナダ極北地域における知識をめぐる抗争——共同管理におけるイデオロギーの相克」秋道智彌、岸上伸啓（編）『紛争の海——水産資源管理の人類学』, pp. 149-167. 人文書院 .
- 2002d 「本質主義的な記述を超えるために——『社会：個人』の二元論への状況的認知論からの挑戦」『文化人類学研究』3, 76-100. 早稲田大学文化人類学会 .
- 2003a 「カナダ極北圏におけるヌナヴト野生生物管理委員会の挑戦——2つの科学の統合から協力へ」岸上伸啓（編）『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告46）, pp. 73-100. 国立民族学博物館 .
- 2003b 「近代科学に抗する科学——イヌイトの伝統的な生態学的知識にみる差異の構築と再生産」『社会人類学年報』29, pp. 11-42. 東京都立大学社会人類学会 .
- 2003c 「野生の思考の可能性」スチュアート・ヘンリ（編）『『野生』の誕生——未開イメージの歴史』, pp. 188-217. 世界思想社 .
- 2005a 「差異の反復——カナダ・イヌイトの実践知にみる記憶と身体」『文化人類学（旧民族学研究）』70(2), pp. 247-270. 日本文化人類学会 .
- 2005b 「差異を愛する権利——『イヌイトの知識』が主張する野生の秩序」『立命館言語文化研究』16(3), pp. 77-86. 立命館大学国際言語文化研究所 .
- 2005c 「文化多様性への扉——人類学と先住民研究」本多俊和、大村敬一、葛野浩昭（編）『文化人類学研究——先住民の世界』, pp. 29-55. (財)放送大学教育振興会 .
- 2005d 「野生の科学と近代科学——先住民の知識」本多俊和、大村敬一、葛野浩昭（編）『文化人類学研究——先住民の世界』, pp. 115-139. (財)放送大学教育振興会 .
- 2005e 「合わせ鏡の無限廊下」『記憶の生態学にむけて——歴史学と人類学の新しいアプローチ』, pp. 1-11. 大阪大学大学院言語文化研究科 .
- 2006a 「視覚芸術の構造を探る試み」和光大学総合文化研究所（編）『象徴図像研究——動物と象徴』, pp. 245-279. 和光大学総合文化研究所 .
- 2006b 「物語のタペストリー」北海道立北方民族博物館（編）『環北太平洋の環境と文化』, pp. 246-264. 北海道立北方民族博物館 .

岡 千曲

- 1982 「北アラスカにおける海の民と陸の民——その現実と神話」『政経論叢』50(5/6), pp. 377-390. 明治大学政治経済研究所 .
- 1983 「タブー・病気・シャーマニズム——エスキモー世界の構造と医療の論理」『相模女子大学紀要』47, pp. 179-184. 相模女子大学 .

岡田淳子

- 1973 「遺跡形成論——プエブロ・インディアンの事例を中心として」『研究紀要』8, pp.

- 1-10. 国立音楽大学 .
- 1988 「西南アラスカ・ケアリガミウトの居住体系」『北海道東海大学紀要人文社会科学系』1, pp. 17-42. 北海道東海大学 .
- 1992 「アラスカ・エスキモーの仮面——生き続ける伝統」岡田宏明、岡田淳子（編）『北の人類学——環極北地域の文化と生態』（人間の探検シリーズ）, 31-56. アカデミア出版会 .
- 1999 『北の民族誌——北太平洋文化の系譜』アカデミア出版会 .
- 岡田宏明
- 1976a 「西南アラスカ・エスキモーの集落——ネルソン島の事例を中心に」『北方文化研究』9, pp. 1-27. 北海道大学文学部附属北方文化研究施設 .
- 1976b 「アラスカ半島ポート・モラーのホット・スプリングス遺跡において1974年に発掘された人骨」*Bulletin of the National Science Museum. Series D, Anthropology*, 2, pp. 25-35. 国立科学博物館 .
- 1976c 「アラスカにおけるトナカイ飼育」『北方文化研究』10, pp. 119-132. 北海道大学文学部附属北方文化研究施設 .
- 1979 『文化と環境——エスキモーとインディアン』北海道大学図書刊行会 .
- 1992 「西南アラスカ・エスキモーの文化的伝統——ネルソン島の事例から」岡田宏明、岡田淳子（編）『北の人類学——環極北地域の文化と生態』, 7-30. アカデミア出版会 .
- 1994 『北の文化誌——雪氷圏に生きる人々』アカデミア出版会 .
- 1996 「エスキモー」ヨーゼフ・クライナー（編）『日本民族学の現在——1980年代から90年代へ』, pp. 379-387. 新曜社 .
- 2001 「北米北西海岸南部のクララム（Klallam）族が歩んできた道」『北海学園大学人文論集』18, pp. 5-16. 北海学園大学 .
- 岡田宏明、岡田淳子 OKADA Hiroaki and OKADA Atsuko
- 2000 “Port Moller: An Ecological Climax under a Changing Climate.”『北海道立北方民族博物館研究紀要』9, pp. 1-16. (財) 北方文化振興協会 .
- 2006 「ポート・モラー」北海道立北方民族博物館（編）『環北太平洋の環境と文化』, pp. 196-212. 北海道立北方民族博物館 .
- 岡田宏明、岡田淳子（編）OKADA Hiroaki and OKADA Atsuko (eds.)
- 1992a 『北の人類学——環極北地域の文化と生態』アカデミア出版会 .
- 1992b *Heceta Island, Southeastern Alaska (2): Anthropological Survey in 1989 & 1990*. Sapporo: Department of Behavioral Science, Faculty of Letters, Sapporo: Hokkaido University.
- 岡庭（松林）義行 MATSUBAYASHI Yoshiyuki
- 1998a 「<ダンカンニアン>という名の先住民——Alaska-TsimshianにおけるDuncan Society Model」『政治学研究論集』7, pp. 93-111. 明治大学 .
- 1998b “Immigration and Christianity in Alaska-Tsimshian.”『北海道立北方民族博物館研究紀要』7, pp. 31-50. 北海道立北方民族博物館 .
- 1998c 「移住とキリスト教——アラスカ・チムシアンにおけるDSMとその形成過程」『北海道立北方民族博物館研究紀要』7, pp. 31-50. 北海道立北方民族博物館 .

- 2004 「パフォーマンスの人類学——カナダ・クワキウトゥルにおける〈ツェカ〉の劇場性」『帯広大谷短期大学紀要』41, pp. 27-44. 帯広大谷短期大学.
- 2006a 「『私たちの文化』の生まれるとき」北海道立北方民族博物館(編)『環北太平洋の環境と文化』, pp. 226-243. 北海道立北方民族博物館.
- 2006b 「先住民であり、先住民でない人びと——アラスカ・チムシヤン」『季刊民族学』118, pp. 82-85. 国立民族学博物館.
- 加藤 薫
- 1998 『ニューメキシコ——第四世界の多元文化』新評論.
- 2007 「ナバホの精神世界としての大地」綾部恒雄(編)『講座世界の先住民民族——ファースト・ピープルの現在——10 失われる文化・失われるアイデンティティ』, pp. 73-88. 明石書店.
- 鎌田 遵
- 2006 「『辺境』の抵抗——核廃棄物とアメリカ先住民の社会運動」御茶の水書房.
- 蒲生正男 GAMO Masao
- 1964 「アラスカ・エスキモーにおけるバンドの構造原理」『民族学研究』28(2), pp. 1-32. 日本民族学会.
- 1980a “Alaskan Studies by Japanese Anthropologists.” In KOTANI Yoshinobu and William WORKMAN, eds., *Alaskan Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies 4), pp. 17-21. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 1980b “The Band Structure and Acculturation among the Eskimos of Nelson Island, Southwest Alaska.” In KOTANI Yoshinobu and William WORKMAN, eds., *Alaskan Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies 4), pp. 157-167. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 岸上伸啓 KISHIGAMI Nobuhiro
- 1987 「伝統ネツリク・イヌイト社会における第1イトコ選好婚について」『社会学年誌』28, pp. 97-112. 早稲田大学社会学会.
- 1988 「伝統イヌイト社会における女子嬰兒殺しに関する諸説の紹介と検討——ネツリク・イヌイトの事例を中心に」『民族学研究』53(2), pp. 206-213. 日本民族学会.
- 1991 「カナダ国北西準州ペリーベイ村におけるネツリク・イヌイトの拡大家族について」『北海道教育大学紀要第一部B社会科学編』42(1), pp. 1-12. 北海道教育大学.
- 1992a 「カナダ・イヌイトは如何にしてキリスト教徒になりしや——諸説の紹介と検討」『北海道教育大学紀要第一部B社会科学編』42(2), pp. 23-34. 北海道教育大学.
- 1992b 「北米先住民に関するエスノヒストリー研究の最近の展開について(その1)」『北海道教育大学紀要第一部B社会科学編』43(1), pp. 63-77. 北海道教育大学.
- 1993a 「カナダ・イヌイトの精神世界における動物——ネツリク・イヌイトの犬を中心に」『北海道教育大学紀要第一部B社会科学編』44(1), pp. 1-12. 北海道教育大学.
- 1993b 「生活空間を通してみるカナダ・イヌイト社会の変化について」岡田宏明(編)『環極北文化の比較研究』, pp. 41-54. 北海道教育大学.
- 1993c 「北米先住民に関するエスノヒストリー研究の最近の展開について(その2)」『北海道

- 教育大学紀要第一部 B 社会科学編』43(2), pp. 15-26. 北海道教育大学 .
- 1994a “Why Become Christians? Hypotheses on the Christianization of the Canadian Inuit.” In Irimoto Takashi and Yamada Takako, eds., *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*, pp. 221-235. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 1994b 「カナダ極北地域における先住民教育についての文化人類学的研究——カナダ北西準州ペリーベイ村の学校教育の事例を中心に」『僻地教育研究』48, pp. 25-39. 北海道教育大学 .
- 1994c 「現代ネツリック・イヌイット社会における社会関係について——カナダ国北西準州ペリーベイ村の事例を中心に」『国立民族学博物館研究報告』19(3), pp. 405-448. 国立民族学博物館 .
- 1995 「カナダ国ケベック州クラー・インディアンの社会経済変容——ジェームス湾および北ケベック協定の諸影響」『北海道教育大学紀要第一部 B 社会科学編』46(1), pp. 45-59. 北海道教育大学 .
- 1996a 「カナダ・イヌイットの名前、名前の靈魂と社会変化」『北海道教育大学紀要第一部 B 社会科学編』46(2), pp. 27-37. 北海道教育大学 .
- 1996b 「カナダ・イヌイット社会の社会・経済変化——ケベック州のイヌクジュアク村の事例を中心に」『国立民族学博物館研究報告』21(4), pp. 715-775. 国立民族学博物館 .
- 1996c 「カナダ極北地域における社会変化の特質について」スチュアート・ヘンリ（編）『採集狩猟民の現在』, pp. 13-52. 言叢社 .
- 1997a “Personal Names, Name Souls and Social Change Among Canadian Inuit: A Case Study of Akulivik Inuit, Nunavik, Canada.” In Yamada Takako and Irimoto Takashi, eds., *Circumpolar Animism and Shamanism*, pp. 151-166. Sapporo: Hokkaido University Press.
- 1997b 「イヌイット女性——極北の働き者」綾部恒雄（編）『女の民族誌 2 ——欧・米・中東・アフリカ・オセアニア篇』, pp. 131-152. 弘文堂 .
- 1997c 「カナダの都市先住民について——モントリオールのイヌイットを中心に」『カナダ研究年報』17, pp. 66-72. 日本カナダ学会 .
- 1998a 『極北の民——カナダ・イヌイット』弘文堂 .
- 1998b 「つくり変えられたイグルー」佐藤浩司（編）『住まいをつむぐ』（シリーズ建築人類学《世界の住まいを読む》1）, pp. 141-158. 学芸出版社 .
- 1998c 「ヌナヴィク・イヌイットのハンター・サポート・プログラムの運用と社会変化」北海道教育大学（編）『人文論究』66, pp. 27-41. 函館人文学会 .
- 1999a 「カナダ・イヌイットの個人名と命名」上野和男、森謙二（編）『名前と社会——名づけの家族史』, pp. 252-271. 早稲田大学出版会 .
- 1999b 「カナダにおける都市在住イヌイットの社会・経済状況——モントリオール地区の調査報告を中心に」『国立民族学博物館研究報告』24(2), pp. 205-245. 国立民族学博物館 .
- 1999c 「カナダ・イヌイットはなぜ都市をめざすのか——モントリオール地区の事例を中心に」青柳清孝、松山利夫（編）『先住民と都市——人類学の新しい地平』, pp. 195-212. 青木書店 .
- 1999d “Life and Problems of Urban Inuit in Montreal: Report of 1997 Research.” 北海道教育大学（編）『人文論究』68, pp. 81-109. 函館人文学会 .

- 1999e 「先住民資源論序説——資源をめぐる人類学的研究の可能性について」北海道教育大学（編）『人文論究』68, pp. 63-80. 函館人文学会 .
- 2000 “Contemporary Inuit Food Sharing and Hunter Support Program of Nunavik, Canada.” In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda, and Nobuhiro Kishigami, eds., *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies 53), pp. 171-192. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2001a 「カナダ・イヌイット社会における海洋資源の利用と管理——ヌナヴィクのシロイルカ資源の場合」『人文論究』70, pp. 29-52. 北海道教育大学 .
- 2001b 「北米北方地域における先住民による諸資源の交易について——毛皮交易とその影響を中心に」『国立民族学博物館研究報告』25(3), pp. 293-354. 国立民族学博物館 .
- 2001c 「エスニック・アートとイヌイット文化の表象——1999年度民博特別展示との関連で」中牧弘充（編）『国立民族学博物館研究報告別冊——アートと民族文化の表象』22, pp. 57-77. 国立民族学博物館 .
- 2002a 「カナダ極北地域における海洋資源をめぐる紛争——ヌナヴィク地域のシロイルカ資源を中心に」秋道智彌、岸上伸啓（編）『紛争の海——水産資源管理の人類学』, pp. 295-314. 人文書院 .
- 2002b 「カナダ・イヌイット社会におけるキリスト教の展開とその諸影響について——ヌナヴィク地域の事例を中心に」杉本良男（編）『宗教と文明化』（20世紀における諸民族文化の伝統と変容7）, pp. 143-158. ドメス出版 .
- 2002c “Living as an Inuk in Montreal: Social Networks and Resource Sharing.” 北海道教育大学（編）『人文論究』71, pp. 73-84. 函館人文学会 .
- 2002d 「カナダ極北地域における海洋資源の汚染問題——その現状と文化人類学者の役割」『国立民族学博物館研究報告』27(2), pp. 237-281. 国立民族学博物館 .
- 2002e 「18-20世紀におけるベーリング海峡地域の先住民交易と社会組織」佐々木史朗（編）『開かれた系としての狩猟採集社会』（国立民族学博物館調査報告34）, pp.39-50. 国立民族学博物館 .
- 2003a 「狩猟採集社会における食物分配——諸研究の紹介と批判的検討」『国立民族学博物館研究報告』27(4), pp. 725-752. 国立民族学博物館 .
- 2003b 「狩猟採集社会における食物分配の類型について——『移譲』、『交換』、『再・分配』」『民族学研究』68(2), pp. 145-164. 日本民族学会 .
- 2003c 「カナダ極北圏ヌナヴィク地域におけるシロイルカ資源の共同管理について」岸上伸啓（編）『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告46）, pp. 101-129. 国立民族学博物館 .
- 2003d 「海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究」岸上伸啓（編）『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告46）, pp. 7-46. 国立民族学博物館 .
- 2004a “Cultural and Ethnic Identities of Inuit in Canada.” In Irimoto Takashi and Yamada Takako, eds., *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies, 66), pp. 81-93. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2004b 「カナダ・イヌイット社会におけるメディアの利用について——ヌナヴィク地域の事例を中心に」『人文論究』73, pp. 17-31. 北海道教育大学 .
- 2004c “A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special

- Focus on Inuit Examples.” *Journal of Anthropological Research* 60(3), pp. 341-358. University of New Mexico.
- 2004d “Trends in Native North American Studies in Japan since the 1990s.” In *Japanese Review of Cultural Anthropology* 5, pp. 91-121. Japanese Society of Cultural Anthropology.
- 2005a 『イヌイト——「極北の狩猟民」のいま』中央公論新社.
- 2005b “Co-Management of Beluga Whales in Nunavik (Arctic Quebec), Canada.” In KISHIGAMI, N. and J. SAVELLE (eds.) *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies 67), pp. 121-144. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2005c 「日本人による北アメリカ先住民研究の動向について——1990年代以降を中心に」北海道教育大学（編）『人文論究』74, pp. 13-42. 函館人文学会.
- 2005d 「カナダ極北の先住民イヌイト」岸上伸啓（編）『極北（世界の食文化20）』, pp. 121-159. 農山漁村文化協会.
- 2005e 「ケベック州のクリーとイヌイト——狩猟採集民社会の再生と変容」富田虎男、スチュアート・ヘンリ（編）『講座世界の先住民——ファースト・ピープルの現在——07 北米』, pp. 277-290. 明石書店.
- 2006a 「カナダ・イヌイトの食物分配に関する文化人類学的研究——先住民社会の変容と再生産」（総合研究大学院大学文化科学研究科提出博士論文）.
- 2006b 「都市イヌイトのコミュニティ形成運動——人類学的実践の限界と可能性」『文化人類学（旧民族学研究）』70(4), pp. 505-527. 日本文化人類学会.
- 2006c “Inuit Social Networks in an Urban Setting.” In P. STERN and L. STEVENSON (eds.) *Critical Inuit Studies: An Anthology of Contemporary Arctic Ethnography*, pp. 206-216. Lincoln, Nebraska: University of Nebraska Press.
- 2006d 「イヌイトの食物分配に関する覚書」北海道立北方民族博物館（編）『環北太平洋の環境と文化』, pp. 265-276. 北海道立北方民族博物館.
- 2006e 「北アメリカ先住民社会の現在」『季刊民族学』118, pp. 44-49. 国立民族学博物館.
- 2006f 「ヌナヴィク・イヌイト社会」『季刊民族学』118, pp. 72-77. 国立民族学博物館.
- 2006g 「環境人類学」綾部恒雄（編）『文化人類学20の理論』, pp. 197-212. 弘文堂.
- 2007a 「カナダ・イヌイトの文化的アイデンティティとエスニック・アイデンティティ」煎本孝、山田孝子（編）『北の民の人類学——強国に生きる民族性と帰属性』, pp. 37-58. 京都大学学術出版会.
- 2007b 「北方先住民の社会経済開発——カナダ・イヌイトの場合」煎本孝、山岸俊男（編）『現代文化人類学の課題——北方研究からみる』, pp. 126-149. 世界思想社.
- 岸上伸啓（編）
- 2003 『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告46）国立民族学博物館.
- 2005 『極北』（世界の食文化20）農山漁村文化協会.
- KISHIGAMI Nobuhiro and SAVELLE, James (eds.)
- 2005 *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies 67). Osaka: National Museum of Ethnology.

岸上伸啓, スチュアート ヘンリ

- 1994 「現代ネットリック・イヌイット社会における社会関係について——カナダ国北西準州ベリーベイ村の事例を中心に」『国立民族学博物館研究報告』19(3), pp. 405-448. 国立民族学博物館.

北沢方邦

- 1976 『ホビの太陽——現代文明批判』研究社.
 1992 『蛇と太陽とコロンブス——アメリカインディアンに学ぶ脱近代』農山漁村文化協会.
 1995 『歳時記のコスモロジー——時の声を聴く』平凡社.
 1996 『ホビの聖地へ——知られざる「インディアン」の国』東京書籍.
 2005 「ホビ——精緻な宇宙論体系を持つ部族」富田虎男、スチュアート ヘンリ (編) 『講座 世界の先住民族——ファースト・ピープルズの現在—— 07 北米』, pp. 194-206. 明石書店.

木村武史

- 1996 「『母なる大地』を巡って——ホデノサウニ (イロクォイ) 神話の宗教史的解釈の一試み」『宗教研究』70(2), pp. 25-47. 日本宗教学会.
 1998 「太陽と大地の象徴的結合——アパッチ成年式における少女」『山口大学哲学研究』7, pp. 113-148. 山口大学.
 2000 『北米先住民ホティノンションーニ (イロクォイ) 神話の研究』大学教育出版.
 2004a 「北米先住民ホビのマーサウを巡る歴史と神話」荒木美智雄 (編) 『世界の民衆宗教』, pp. 107-132. ミネルヴァ書房.
 2004b 「ホデノシヨニ (イロクォイ) 社会の『宗教』」『アメリカ研究』38, pp. 1-19. アメリカ学会.
 2005 「ネイティブの諸結社——ホデノシヨニ連邦」綾部恒雄 (編) 『クラブが創った国アメリカ』, pp. 72-83. 山川出版社.

久保田亮

- 2005 「儀礼とダンスの断絶——宣教師の活動をめぐるアラスカ先住民ユピックの歴史認識」『東北人類学論壇』4, pp. 1-20. 東北大学大学院文学研究科文化人類学研究室.
 2006 「社交期としての冬——冬季娯楽行事にみるユピック／チュピック社会生活の変化と持続」『東北人類学論壇』5, pp. 1-17. 東北大学大学院文学研究科文化人類学研究室.

呉人 恵・齋藤玲子

- 2005 「トナカイ遊牧民コリヤークの植物利用に関するレポート」『北海道立北方民族博物館研究紀要』14, pp. 63-92. 北海道立北方民族博物館.

小谷凱宣

- 1974 「アラスカの初期人類の文化とその自然環境」『法文論叢文科篇』33, pp. 1-32. 熊本大学法文学会.
 1983 「ペリンジアからみた新大陸文化起源の諸問題」『国立民族学博物館研究報告』8(2), pp. 489-520. 国立民族学博物館.
 1986 「極北・亜極北」日本民族学会 (編) 『日本の民族学 1964-1983』, pp. 202-205. 弘文堂.
 1990 「アラスカ原住民の生活の変遷——〈アラスカ原住民要求解決法〉をめぐって」阿部年

晴、伊東亜人、荻原真子（編）『民族文化の世界——社会の統合と動態』（下巻），pp. 595-612. 小学館．

KOTANI Yoshinobu and WORKMAN, William

1980 *Alaska Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies 4). Osaka: National Museum of Ethnology.

齋藤玲子

- 1993 「北方諸民族における現代の民族芸術研究への課題——イヌイト・アートの商品化の歴史を中心に」『北海道立北方民族博物館研究紀要』2, pp. 89-102. 北海道立北方民族博物館．
- 1997 「コペンハーゲン・グリーンランドにおけるイヌイト民族資料調査概報」『北海道立北方民族博物館研究紀要』6, pp. 147-166. 北海道立北方民族博物館．
- 1998 「極北地域における毛皮革の利用と技術」『北海道立北方民族博物館研究紀要』7, pp. 69-92. 北海道立北方民族博物館．
- 2000 「アラスカ観光に挑むトーテムポールの人びと」『北方圏』111, pp. 12-16. 社団法人北方圏センター．
- 2006a 「極北地域における毛皮革の利用と技術」北海道立北方民族博物館（編）『環北太平洋の環境と文化』, pp. 65-83. 北海道立北方民族博物館．
- 2006b 「北西海岸先住民と観光——サケとトーテム・ポールを資源に」『季刊民族学』118, pp. 86-89. 国立民族学博物館．
- 2006c 「カナダ北西海岸先住民に関連した博物館の概況」『北海道立北方民族博物館研究紀要』15, pp. 85-94. 北海道立北方民族博物館．

新保 満

- 1967 「カナダ・インディアンの同化に対する寄宿学校の貢献とその限界」『民族学研究』32(3), 199-209. 日本民族学会．
- 1968 『カナダ・インディアン——滅びゆく少数民族』三省堂．
- 1993 『カナダ先住民デネーの世界——インディアン社会の変動』明石書店．
- 1999 「デネー社会の変容——都市移住を志向する先住民社会」青柳清孝、松山利夫（編）『先住民と都市——人類学の新しい地平』, pp. 180-194. 青木書店．
- 2007 「カナダ・デネーの教育」綾部恒雄（編）『講座世界の先住民——ファースト・ピープルの現在—— 10 失われる文化・失われるアイデンティティ』, pp. 332-343. 明石書店．

新保満、シンサ・アン・ストラザーズ

1999 『変貌する先住民社会と学校教育——カナダ北西準州デネーの事例』御茶の水書房．

スチュアート ヘンリ STEWART, Henry (本多俊和)

- 1985 「先史エスキモー文化の装飾について——極北 4,000 年間の『美術史』序説」『古代』80, pp. 448-475.
- 1989 「エスキモー／インディアンの交渉小史——民族とエスニシティの原像を探って」北方言語・文化研究会（編）『民族接触——北の視点から』, pp. 100-126. 六興出版．

- 1990 「伝統ネツリック・イヌイトのイヌクシユクによるカリブー猟——民族学と考古学のはざま」『民族学研究』55(1), pp. 75-86. 日本民族学会.
- 1991a 「食料分配における男女の役割分担について——ネツリック・イヌイト社会における獲物・分配・世界観」『社会人類学年報』17, pp. 115-127. 東京都立大学社会人類学会.
- 1991b 『北アメリカ大陸先住民の謎』光文社.
- 1992 「ネツリック・イヌイトの漁労——夏の築漁を中心に」『北海道立北方民族博物館研究紀要』1, pp. 31-52. 北海道立北方民族博物館.
- 1993a 「ネツリック・イヌイト社会における春の生業——5～6月のカリブー猟と漁労を中心に」『北海道立北方民族博物館研究紀要』2, pp. 13-36. 北海道立北方民族博物館.
- 1993b 「アリュート民族のミイラ風習——樺太アイヌのミイラと比較して」日本ミイラ研究グループ (編) 『日本・中国ミイラ信仰の研究』, pp. 333-354. 平凡社.
- 1993c 「イヌイトか、エスキモーか——民族呼称の問題」『民族学研究』58(1), pp. 85-88. 日本民族学会.
- 1993d 「極北地帯の石干見——特殊な築に関する民俗学・考古学的研究」『史観』128, pp. 64-79. 早稲田大学史学会.
- 1994 「アメリカインディアン——先住民忍従の五〇〇年」『ブリタニカ国際大百科事典』第一巻, pp. 380-394. TBS ブリタニカ.
- 1996a 「ツンドラの人類学——北アメリカ大陸極北のイヌイトとエスキモー」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』2, pp. 45-51. 昭和女子大学.
- 1996b 「現在の狩猟採集民にとっての生業生活の意義」スチュアート ヘンリ (編) 『採集狩猟民の現在——生業文化の変容と再生』, pp. 125-154. 言叢社.
- 1997a 「北部ケベックの先住民——二つのマジョリティに翻弄されるイヌイトとインディアン」西川長夫、渡辺公三、ガバン・マコーマック (編) 『多文化主義・多言語主義の現在——カナダ・オーストラリア・そして日本』, pp. 109-132. 人文書院.
- 1997b 「先住民運動——その歴史、展開、現状と展望」青木保他 (編) 『紛争と運動』(岩波講座文化人類学 第六巻), pp. 229-255. 岩波書店.
- 1998a 「民族呼称とイメージ——『イヌイト』の創成とイメージ操作」『民族学研究』63(2), pp. 151-159. 日本民族学会.
- 1998b 「先住民が成立する条件——理念から現実への軌跡」清水昭俊 (編) 『周辺民族の現在』, pp. 235-263. 世界思想社.
- 1998c 「現代社会を生きる先住民——〈狩猟する〉カナダ・イヌイト」原尻英樹 (編) 『世界の民族——「民族」形成と近代』, pp. 173-190. 放送大学教育振興会.
- 1999a 「〈民族〉、そしてその周辺」『民族学研究』63(4), pp. 420-429. 日本民族学会.
- 1999b 「都市の〈インディアン〉——カナダとアメリカの政策と先住民の都市化」青柳清孝、松山利夫 (編) 『先住民と都市——人類学の新しい地平』, pp. 163-179. 青木書店.
- 2000a 「カナダ・イヌイト社会の分業と男女関係」川崎賢子、中村陽一 (編) 『アンペイド・ワークとは何か』, pp. 208-224. 藤原書店.
- 2000b 「先住民をめぐる社会科教科書の記述——日本とカナダの比較研究」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』6, pp. 63-255. 昭和女子大学.
- 2002a "Ethnonyms and Images: Genesis of the 'Inuit' and Image Manipulation." In

- Henry Stewart, Alan Barnard, and Omura Keiichi, eds., *Self- and Other-Images of Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies 60), pp. 85-100. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2002b “Kipijuituq in Netsilik Society: Changing Patterns of Gender and Patterns of Changing Gender.” In L. Frink, R. S. Shepard, and G. A. Reinhardt, eds., *Many Faces of Gender: Roles and Relationships through Time in Indigenous Northern Communities*, pp. 13-25. Boulder: University Press of Colorado.
- 2002c 「先住民と国民国家——カナダ・ケベック州を中心に」梶田孝道、小倉充夫（編）『国民国家はどう変わるか』（国際社会 第三巻），pp. 195-223. 東京大学出版会．
- 2002d 『民族幻想論——あいまいな民族つくられた人種』解放出版社．
- 2003a 「野生と野性の誕生」スチュアート・ヘンリ（編）『「野生」の誕生——未開イメージの歴史』, pp. 27-49. 世界思想社．
- 2003b 「野性から未開へ」スチュアート・ヘンリ（編）『「野生」の誕生——未開イメージの歴史』, pp. 241-263. 世界思想社．
- 2004a 「今を生きるイヌイトの老人——知識と技術の宝庫」青柳まちこ（編）『老いの人類学』, pp. 115-136. 世界思想社．
- 2004b 「先住民年の10年をふりかえって——協調と紛争」『文化人類学研究』5, pp. 2-13. 早稲田大学文化人類学会．
- 2005a 「グリーンランド、カナダ、アラスカ、シベリアのイヌイト——ツンドラの世界」富田虎男、スチュアート・ヘンリ（編）『講座世界の先住民——ファースト・ピーブルズの現在—— 07 北米』, pp. 219-231. 明石書店．
- 2005b 「アリュート——北方の海洋民」富田虎男、スチュアート・ヘンリ（編）『講座世界の先住民——ファースト・ピーブルズの現在—— 07 北米』, pp. 264-276. 明石書店．
- 2005c 「先住民とは何か」本多俊和、大村敬一、葛野浩昭（編）『文化人類学研究——先住民の世界』, pp. 11-27. (財) 放送大学教育振興会．
- 2005d 「民族文化としての採集狩猟活動——イヌイトの事例から」本多俊和、大村敬一、葛野浩昭（編）『文化人類学研究——先住民の世界』, pp. 81-96. (財) 放送大学教育振興会．
- 2005e 「メディアと先住民——表象する側とされる側」本多俊和、大村敬一、葛野浩昭（編）『文化人類学研究——先住民の世界』, pp. 211-223. (財) 放送大学教育振興会．
- 2005f 「イヌイトの<若者>——<伝統>時代」宮本みち子（編）『比較文化研究——若者とジェンダー』, pp. 55-66. (財) 放送大学教育振興会．
- 2005g 「イヌイトの<若者>——現状」宮本みち子（編）『比較文化研究——若者とジェンダー』, pp. 67-80. (財) 放送大学教育振興会．
- 2006 「定住と生業」北海道立北方民族博物館（編）『環北太平洋の環境と文化』, pp. 277-291. 北海道立北方民族博物館．
- 2007 「先住権と権原——先住民の基本的権利について」綾部恒雄（編）『講座世界の先住民——ファースト・ピーブルズの現在—— 10 失われる文化・失われるアイデンティティ』, pp. 132-145. 明石書店．
- スチュアート・ヘンリ（編）
- 1996 『採集狩猟民の現在——生業文化の変容と再生』言叢社．

STEWART, Henry, BARNARD, Alan, and OMURA Keiichi (eds.)

2002 *Self and Other-Images of Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies 60), pp. 85-100. Osaka: National Museum of Ethnology.

2003 『野生』の誕生——未開イメージの歴史』世界思想社.

スチュアート ヘンリ、大村敬一

2003 『野生』をめぐるイメージの虚実』スチュアート ヘンリ (編) 『野生』の誕生——未開イメージの歴史』, pp. 1-26. 世界思想社.

スチュアート ヘンリ、岸上伸啓

1986 「遊びに関する研究の基礎理論 (その1) ——伝統エスキモー社会の遊び研究への序説」『史観』115, pp. 47-59. 早稲田大学史学会.

1987 「遊びに関する研究の基礎理論 (その2) ——伝統エスキモー社会の遊び研究への序説」『史観』117, pp. 14-27. 早稲田大学史学会.

2007 「北米先住民と都市」綾部恒雄 (編) 『講座世界の先住民族——ファースト・ピープルの現在—— 10 失われる文化・失われるアイデンティティ』, pp. 271-284. 明石書店.

スチュアート ヘンリ、山浦清

1989 『カナダ北西準州ベリーベイにおける考古学民族学調査概報』山本印刷.

祖父江孝男

1972 『アラスカ・エスキモー』社会思想社.

1977 『北アメリカ』(民族探検の旅 第七集) 学習研究社.

高橋順一

1985a 「沈黙の意味と汎化——カイオワ文化の場合」『民族学研究』49(4), pp. 351-357. 日本民族学会.

1985b 「マジックナンバー “4” ——アメリカンインディアンの英語談話にみる伝統的プラグマティクス」『民族学研究』50(1), pp. 89-96. 日本民族学会.

1986 「逆数の意味——カイオワ語逆数表示の機能主義的分析」『民族学研究』51(2), pp. 191-200. 日本民族学会.

2002 『はるかなるオクラホマ——ネイティブアメリカン・カイオワ族の物語りと生活』はる書房.

立川陽仁

1999a 「研究動向——ポトラッチ研究史と将来の展望」『社会人類学年報』25, pp. 167-185. 東京都立大学社会人類学会.

1999b 「クワクワカクワ貴族層の衰退——カナダ植民地統治期における世界観とポトラッチの変容」『民族学研究』64(1), pp. 1-22. 日本民族学会.

2002a 「サケ漁業・缶詰業とレクウィルトクの経済活動」『社会人類学年報』28, pp. 79-105. 東京都立大学社会人類学会.

2002b 「クワクワカクワはいかに漁業に参入したか——企業家の誕生、活動と戦略」『文化人類学研究』3, pp. 120-142. 早稲田大学人類学会.

2003 「海上におけるサケの『管理』——カナダ北西海岸の先住民漁業漁師／カウンセラーに

- 見られる行為と認識」岸上伸啓(編)『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』(国立民族学博物館調査報告 46), pp. 161-178. 国立民族学博物館.
- 2004a 「カナダの北西海岸先住民にとってのサケの社会・経済的な意義——現代のクワクワカワクワ漁師の経済活動に関する事例から」『国立民族学博物館研究報告』29(2), pp. 307-352. 国立民族学博物館.
- 2004b 「〈意味〉と〈型〉——ポトラッチをめぐるクワクワカワクワ内外の視点」渡邊欣雄(編)『世界の宴会』(『アジア遊学』61), pp. 174-183. 勉誠出版.
- 2005 「クワクワカワクワ——伝統と近代を生きる人びと」富田虎男、スチュアート ヘンリ(編)『講座世界の先住民——ファースト・ピープルの現在—— 07 北米』, pp. 326-339. 明石書店.
- 2006 「カナダ、バンクーバー島の先住民とサケの養殖業」『季刊民族学』118, pp. 90-93. 国立民族学博物館.
- 2007 「近代産業のなかの北米先住民——クワクワカワクワ社会におけるサケ漁業の歴史的意義に関する人類学的研究」(東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻提出博士論文)
- 谷本和子 TANIMOTO Kazuko
- 1994 “Nez Perce Elders and Contemporary Enculturation.” *The Journal of Intercultural Studies* 21, pp. 80-106, The Intercultural Research Institute.
- 1998a 「アメリカ・インディアンアイデンティティ」清水昭俊(編)『周辺民族の現在』, pp. 212-234. 世界思想社.
- 1998b 「インディアンとして宿るティピ」佐藤浩司(編)『住まいをつむぐ』(シリーズ建築人類学《世界の住まいを読む》1), pp. 89-106. 学芸出版社.
- 1998c 「ネズ・パース・インディアンの家族機能についての一考察——核家族の限界と拡大家族の有効性」『研究論集』67, pp. 449-456. 関西外国語大学.
- 2006 「ヒツジがつなぐ伝統と近代——世界で一番タフなミス・コンテスト」『季刊民族学』118, pp. 56-61. 国立民族学博物館.
- 玉山ともよ
- 2006 「米国南西部における先住民のウラン被爆——ラグーナ・プエブロ保留地内のジャックバイル・ウラン鉱山を中心に」『季刊民族学』118, pp. 62-65. 国立民族学博物館.
- 手塚 薫
- 2003 「北米大平原のバイソン利用形態の変化」『北方文化共同事業』2000-2002 年度調査報告』, pp. 183-196. 北海道開拓記念館.
- 富田虎男、スチュアート ヘンリ (編)
- 2005 『講座世界の先住民——ファースト・ピープルの現在—— 07 北米』明石書店.
- NAGATA Shuichi 永田脩一
- 1970 *Modern Transformation of Moenkopi Pueblo*. Urbana, Chicago, and London: University of Illinois Press.
- 馬場優子

- 1992 「掘り棒とトマホーク——イロクォイ母系制における女性の地位と役割（一）」『大妻女子大学紀要（文系）』24, pp. 27-42. 大妻女子大学.
- 2005 「イロクォイ——闘い続ける森の民」富田虎男、スチュアート ヘンリ（編）『講座世界の先住民民族——ファースト・ピープルズの現在—— 07 北米』, pp. 53-68. 明石書店.
- 原ひろ子 HARA Hiroko
- 1967 「ヘヤー・インディアンの親族名称に関する一考察」『民族学研究』31(4), pp. 297-299. 日本民族学会.
- 1970 「ヘヤー・インディアンの親族構造再考」『民族学研究』35(3), pp. 165-176. 日本民族学会.
- 1979 『極北のインディアン』玉川大学出版部.
- 1980 *The Hare Indians and Their World* (National Museum of Man Mercury Series, Canadian Ethnology Paper 63). Ottawa: National Museum of Canada.
- 1982 「ヘヤー・インディアンの女」綾部恒雄（編）『女の文化人類学——世界の女性はどう生きているか』弘文堂.
- 1986 「ヘヤー社会における『テント仲間』と『身うち』」原ひろ子（編）『家族の文化誌——さまざまなカタチと変化』, pp. 7-28. 弘文堂.
- 1989 『ヘヤー・インディアンとその世界』平凡社.
- 北方言語・文化研究会（早稲田大学）
- 1989 『民族接触——北の視点から』六興出版.
- 本多俊和、大村敬一、葛野浩昭
- 2005 「共同の学問、共生の世界へ」本多俊和、大村敬一、葛野浩昭（編）『文化人類学研究——先住民の世界』, pp. 319-344. (財)放送大学教育振興会.
- 本多俊和、大村敬一、葛野浩昭（編）
- 2005 『文化人類学研究——先住民の世界』（財）放送大学教育振興会.
- 牧田満知子
- 1997 「文化としての両性具有——北米インディアン（zuni / crow）における両儀的性役割の考察」『アメリカ研究』31, pp. 157-174. アメリカ学会.
- 1998 「先住民民族と環境保護——ズニ族（New Mexico 州）保護プロジェクトにおける伝統文化の維持と持続可能な開発」『地球環境研究』44, pp. 9-28. 地球環境財団.
- 1999 「先住民民族の文化的独自性と連邦憲法——サンタクララ族対マルチネス事件（1978 年）に関する一考察」『同志社アメリカ研究』35, pp. 127-137. 同志社大学アメリカ研究所.
- 2000 「環境との共生をめざすアメリカ先住民民族文化——ズニ族環境保護プロジェクト（ニューメキシコ州／アメリカ）の現状についての一考察」『環境社会学研究』6, pp. 163-177. 環境社会学会.
- 馬籠久美子
- 1999 「美しき道の教え——北米・ディネの強制移住問題」原田勝弘、下田平裕身、渡辺秀樹（編）『環太平洋先住民民族の挑戦——自治と文化再生をめざす人びと』（世界人権問題叢書 27）, pp. 19-61. 明石書店.
- 益子待也 MASHIKO Machiya

- 1982 「ポトラッチの神話学——トリンギット族における死と再生の論理」『民族学研究』47(3), pp. 221-244. 日本民族学会.
- 1992 「トリンギットの社会と儀礼——南東アラスカの『ポトラッチ』における言葉の交換」岡田宏明、岡田淳子（編）『北の人類学——環極北地域の文化と生態』, pp. 79-105. アカデミア出版会.
- 1993 「鮭の村を訪れた少年——北米北西沿岸インディアンの異界訪問譚」『口承文芸研究』16, pp. 29-48. 日本口承文芸学会.
- 2002 「『ポトラッチ』の観念について（下）」『金沢学院大学文学部紀要』7, pp. 50-70. 金沢学院大学.
- 2005 「トリンギット——過去と現在」富田虎男、スチュアート ヘンリ（編）『講座世界の先住民——ファースト・ピープルの現在—— 07 北米』, pp. 291-307. 明石書店.
- 2006 “A Comparative Study of Raven Myths in the North Pacific Region” 金沢学院大学紀要委員会（編）『金沢学院大学紀要 文学・美術編』4, pp. 43-57. 金沢学院大学.

水野由美子

- 2005 「プエブロー——文化継承のための戦略と課題」富田虎男、スチュアート ヘンリ（編）『講座世界の先住民——ファースト・ピープルの現在—— 07 北米』, pp. 163-177. 明石書店.

宮岡伯人 MIYAOKA Osahito

- 1961 「エスキモー言語学の展望」『民族学研究』26(1), pp. 96-99. 日本民族学協会.
- 1966 「エスキモー語の音位転倒」『小樽商科大学人文研究』31, pp. 97-125. 小樽商科大学.
- 1967 「エスキモー語の二つの廃用接尾辞について」『小樽商科大学人文研究』33, pp. 99-117. 小樽商科大学.
- 1978 『エスキモーの言語と文化』弘文堂.
- 1980 “Alaska Native Languages in Transition.” In KOTANI Yoshinobu and William WORKMAN, eds., *Alaskan Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies 4), pp. 169-203. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 1983 「言語の分化から見た故土——エスキモーとインディアン」和田祐一、崎山理（編）『言語人類学』（現代の人類学3）, pp. 112-128. 至文堂.
- 1985 「A. ピナールと極北諸語関係資料」北海道大学文学部附属北方文化研究施設（編）『北方文化研究』17, pp. 141-164. 北海道大学.
- 1986 「エスキモー語の能格性」『言語研究』90, pp. 97-118. 日本言語学会.
- 1987 『エスキモー——極北の文化誌』岩波書店.
- 1992 「環北太平洋の言語」宮岡伯人（編）『北の言語——類型と歴史』, pp. 3-65. 三省堂.
- 1994 “The Yupik World Seen Through Linguistic Demonstratives.” In Irimoto Takashi and Yamada Takako, eds., *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*, pp. 234-249. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 1996 “Sketch of Central Alaskan Yupik, an Eskimoan Language.” In I. Goddard, ed., *Languages* (Handbook of North American Indians 17), pp. 325-363. Washington, D. C.: Smithsonian Institution.

- 1997 “Morphological Anomaly of Central Alaskan Yupik (Eskimo)” 『京都産業大学国際言語科学研究所所報』 18, pp. 31-45. 京都産業大学.
- 2000 “Morphologie Verbale en Yupik Alaskan Central.” In Nicole Tersis and Michele Therreir, eds., *Les Langues Eskaleoutes: Sibirie, Alaska, Canada, Groenland*, pp. 225-248. Paris: Centre National de la Recherches Scientifique.
- 2002 『「語」とはなにか——エスキモー語から日本語をみる』三省堂.
- 2007 「先住民言語・多様な思考の危機」綾部恒雄（編）『講座世界の先住民民族——ファースト・ピープルの現在—— 10 失われる文化・失われるアイデンティティ』, pp. 27-43. 明石書店.
- 宮岡伯人（編）Miyaoka Osahito (ed.)
- 1992 『北の言語——類型と歴史』三省堂.
- 山田 亨 YAMADA Toru
- 2003 “Court Rulings, Aboriginal Title and Treaty Negotiation Challenges in British Columbia.” 『筑波大学地域研究』 23, pp. 97-117. 筑波大学地域研究研究科.
- 2005 「ニスガーとシーシェルト——自治権を持つ北西沿岸の先住民」富田虎男、スチュアート・ヘンリ（編）『講座世界の先住民民族——ファースト・ピープルの現在—— 07 北米』, pp. 308-325. 明石書店.
- 和智綾子 WACHI Yasuko
- 1994 *What Comes Next? Native Americans of San Diego County: A Study of Uncertainty for an Ethnic Minority Group of Southern California*. Ph. D. Dissertation, University of California, San Diego.
- 1999 「南カリフォルニア・インディアンと都市社会——文化保存と民族アイデンティティの諸問題」青柳清孝、松山利夫（編）『先住民と都市——人類学の新しい地平』, pp. 229-247. 青木書店.
- 2000a 「イヌイット神話の中のセドナ——少女と犠牲についてのジェンダー化された共同体の記憶の＜置き換え＞に関する一試論」『環太平洋女性学研究会会報 Rim』 2(2), pp. 27-42. 城西大学.
- 2000b 「北米先住民の女性像に見るメディアとジェンダー——百年前の世紀転換期の「ラモナ」を今読み直す」『城西国際大学大学院紀要』 4, pp. 1-31. 城西国際大学.
- 渡辺操、岡正雄、杉原荘介
- 1961 『アラスカ——明治大学アラスカ学術調査団』古今書院.
- 渡部 仁
- 1988 「北太平洋沿岸文化圏——狩猟採集民からの視点 I」『国立民族学博物館研究報告』 13(2), pp. 297-356. 国立民族学博物館.
- 1992 「北洋沿岸文化圏——狩猟採集民文化の共通性とその解釈問題」宮岡伯人（編）『北の言語——類型と歴史』, pp. 67-107. 三省堂.
- KEEN, Ian and YAMADA Takako (eds.)
- 2001 *Identity and Gender in Hunting and Gathering Societies (Senri Ethnological Studies 56)*. Osaka: National Museum of Ethnology.

WENZEL, George W., Grete Hovelsrud-Broda, and KISHIGAMI Nobuhiro (eds.)

2000 *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies 53). Osaka: National Museum of Ethnology.

